「指導と評価の一体化」の充実を目指して

―― 実践レポートの作成と活用を通して ――

長期研修員　　角田　智則　　柴﨑　晴央

《研究の概要》

本研究は、令和４年度より高等学校及び中等教育学校後期課程で実施された学習指導要領における観点別学習状況の評価についての理解を深め、指導と評価の一体化のより一層の充実を目指すため、「実践レポート」という様式の開発を行い、研究授業や職員研修での活用を通してその効果を検証したものである。

「実践レポート」には、「単元の指導と評価の計画」を教科内で協働して作成することができる項目と、生徒の学習成果物に対する評価のポイントを記録しておくことができる「学習評価の具体」の項目があり、蓄積したものを次の指導計画の立案や授業実践のために活用できる様式となっている。本研究では、研究協力校において「実践レポート」の作成と活用を通して、指導計画の作成と共有、研究授業、授業改善のための授業研究会、職員研修等を行った結果、参加者の指導と評価の一体化の充実に向けた意識を高めることができた。

キーワード　**【後期中等教育・高等学校　観点別学習状況の評価　指導計画　指導と評価の一体化　職員研修　事例集】**

群馬県総合教育センター

分類記号：Ｈ０４－１　令和４年度　２７９集

本報告書に掲載されている商品又はサービスなどの名称は、各社の商標又は登録商標です。
＜各社の商標又は登録商標＞
Google フォームは、Google LLC の商標又は登録商標です。
なお、本文中には ™ マーク、 ® マークは明記していません。

Ⅰ　研究背景

平成30年３月に告示された高等学校学習指導要領が今年度から年次進行で実施されることに伴い、高等学校では「知識・技能（技術）」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の３観点による評価が令和４年度入学生から開始されている。これに関して、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』には、「学習評価の充実に当たっては、いわゆる評価のための評価に終わることのないよう指導と評価の一体化を図り、学習の成果だけでなく、学習の過程を一層重視し、生徒が自分自身の目標や課題をもって学習を進めていけるように評価を行うことが大切である」とあり、学習の過程における生徒の状況を適切に評価して次の学習や指導に生かしていくことが重要であることが分かる。これらを踏まえ、新たな観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）について、学校現場における教員の理解の状況を把握するために、研究協力校（以下、協力校）の教員を対象にしたアンケート調査を行った（回答数44）。その結果、「『観点別学習状況の評価』について、どの程度理解しているか」という質問に対する回答では、「あまり理解していない」、「全く理解していない」を合わせて63.6％となり、半数以上の教員は観点別評価についての理解が十分でないという現状が明らかとなった（図１）。また、「『指導と評価の一体化』について、どの程度意識して授業をしているか」という質問に対する回答では、「あまり意識していない」、「全く意識していない」を合わせて68.2％となり、指導と評価の一体化を意識した授業が十分に行われていなかったということが分かった（図２）。これらの結果から、観点別評価についての理解を深め、指導と評価の一体化を充実させていくための方策を提案する必要があると考えた。

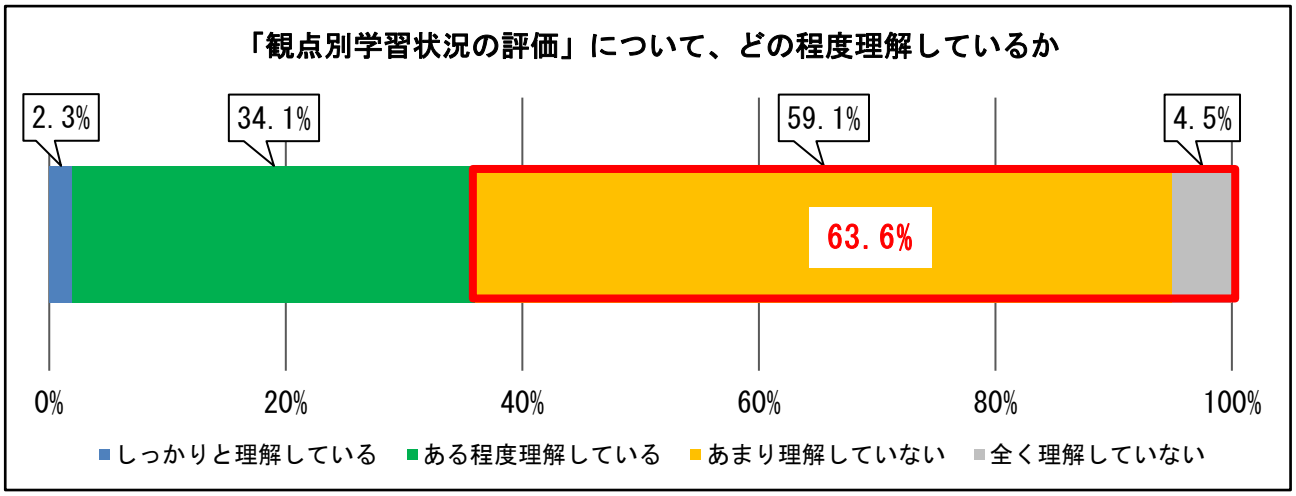


図１　協力校の教員に向けてのアンケート調査の結果①

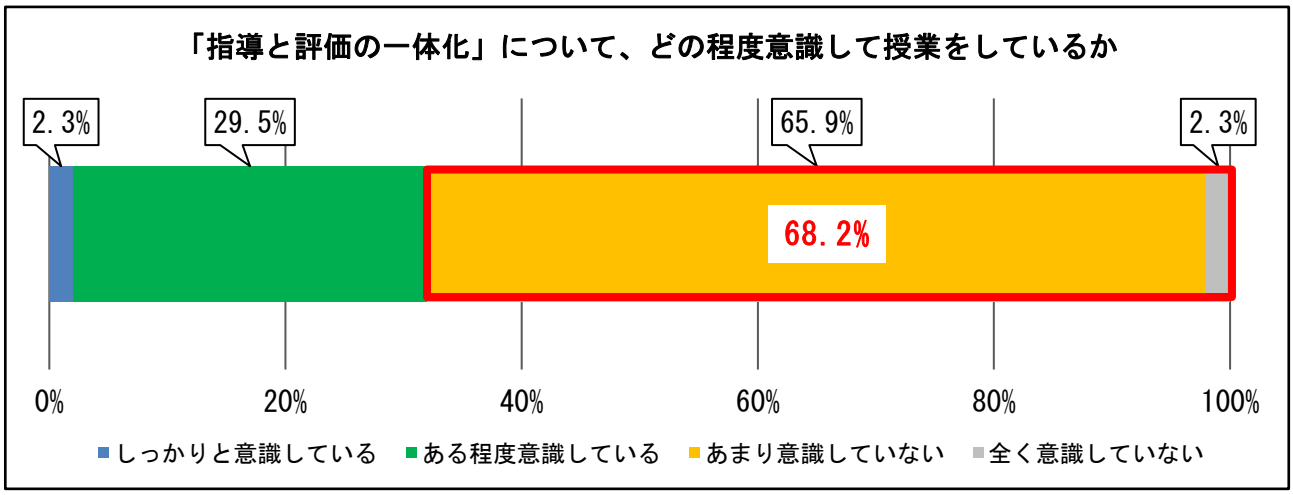


図２　協力校の教員に向けてのアンケート調査の結果②

また、協力校における「『指導と評価の一体化』の実践に当たって、どのようなことが課題だと思うか」という質問に対する自由記述形式の回答では、「指導と評価の一体化のための具体的な手立てがよく分からないこと」、「評価方法に関して具体例を通して理解すること」、「観点別評価のイメージがわかないこと」、「評価のマニュアルを作ること」などの意見が挙げられており、観点別評価や指導と評価の一体化についての具体的な取組のイメージがもてていないということが分かった（図３、表１）。さらに、「どのような活動をどの観点で評価すればよいのか明確にすること」、「統一した活動や評価方法を取るための協議をする時間が取れないこと」、「観点別評価の規準、評価のプロセス等、基本的な事柄を理解すること」、「どのような評価をするか、あらかじめ評価規準を定めておくこと」などの意見も挙げられており、評価規準や評価方法の検討と共有に課題を感じているということが分かった（図３、表１）。

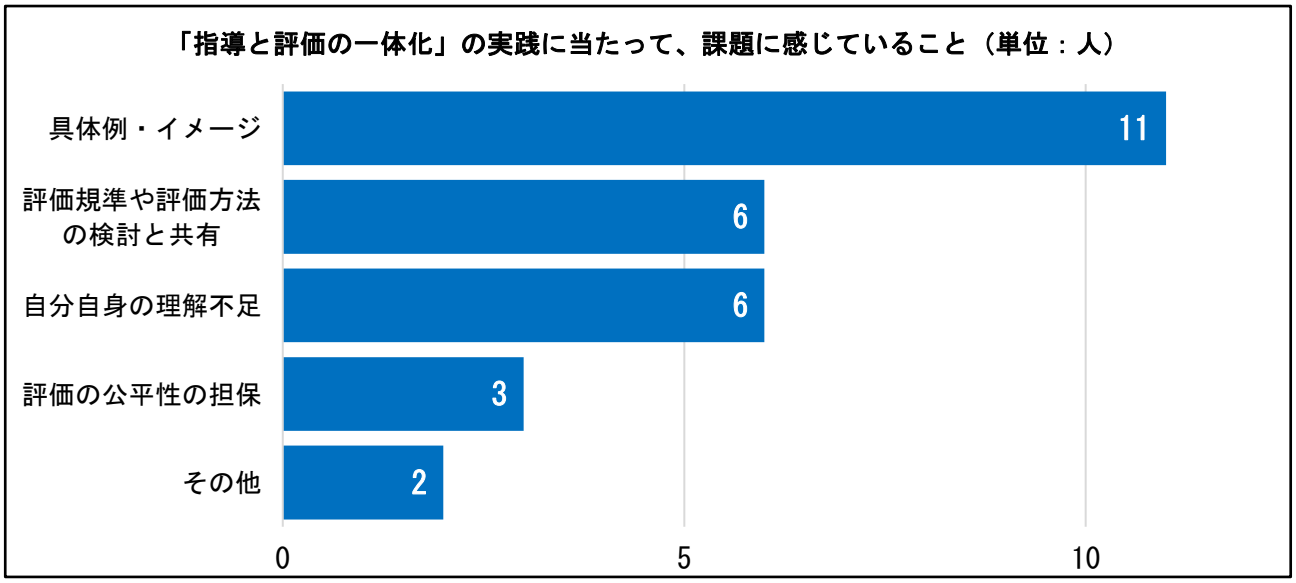


図３　協力校の教員に向けてのアンケート調査の結果③

表１　「指導と評価の一体化」の実践に当たって、どのようなことが課題だと思うか（一部抜粋）

分類	内容
具体例・イメージ	・指導と評価の一体化のための具体的な手立てがよく分からないこと ・評価方法に関して具体例を通して理解すること ・観点別評価のイメージがわかないこと ・評価のマニュアルを作ること ・授業中の活動がどのように評価につながるのかイメージできないこと ・評価の具体的な手法がよく分からないこと
評価規準や評価方法の検討と共有	・どのような評価をするか、具体的にまとめておくこと ・統一した活動や評価方法を取るための協議をする時間が取れないこと ・どのような活動をどの観点で評価すればよいのか明確にすること ・観点別評価の規準、評価のプロセス等、基本的な事柄を理解すること ・評価規準作りが難しいこと

以上のような学校現場の状況を踏まえ、本研究では、「指導と評価の一体化の充実に向けた具体的な取組の蓄積」、「評価規準や評価方法の検討と共有」をしていくための様式の開発を行い、その様式を活用した取組を実践することで、その効果を検証していくことを目指した。また、その様式を活用した協力校における取組を行う中で、「観点別評価の理解をより深めること」や「指導と評価の一体化の充実に向けた意識を更に高めること」を目指した。

Ⅱ　研究方法

「観点別評価の理解をより深めること」や「指導と評価の一体化の充実に向けた意識を更に高めること」を実現するために、以下の二つを手立てとした。

１　『「指導と評価の一体化」実践レポート』の開発

本研究では、「指導と評価の一体化の充実に向けた具体的な取組の蓄積」、「評価規準や評価方法の検討と共有」をしていくことを目的として、『「指導と評価の一体化」実践レポート』（以下、「実践レポート」）の開発を行った。「実践レポート」とは、単元の指導と評価の計画や学習評価の具体的な方法を蓄積していくための様式である。

(1)　「実践レポート」の構成とねらい（１ページ目）

「実践レポート」の１ページ目（次ページ図４）は、授業の前に教科の担当者が協働して作成する。１ページ目には、「１　教科・科目と単元（内容のまとまり）」、「２　単元の評価規準」、「３　単元の指導と評価の計画」を記載する部分があり、学習指導要領を参照しながら、教科の担当者が生徒に身に付けさせたい資質・能力を協議した上で設定する。これにより、生徒にどのような資質・能力を身に付けることが必要かを考えた上で単元の目標を設定し、その目標の達成状況を確認したり、単位時間ごとの見取りをしたりするための評価規準を設定することができる。また、「どの時間にどの観点を、どのような学習成果物を用いて評価するか」、「単元の目標を達成するための単位時間ごとの学習活動をどのように設定するか」ということを協議することで、教科の担当者間の目線合わせをすることができる。

したがって、「実践レポート」の１ページを教科の担当者で協働して作成することで、「評価規準や評価方法の検討と共有」ができる構成となっている。

(2)　「実践レポート」の構成とねらい（２ページ目）

「実践レポート」の２ページ目（５ページ図５）の「４　学習評価の具体」では、あらかじめ設定した「本時の学習活動」、「本時の評価の概要」、「本時の学習状況を見取るための評価規準」を参照して、授業者が自らの実践を振り返りながら「評価の具体」を作成する。この部分については、授業の後に授業担当者が生徒の記述や学習成果物を踏まえて作成することになるため、「生徒の記述や学習成果物について、どの部分をどのように評価したか」、「おおむね満足できる規準に達していない生徒に対してどのような支援をしたか」、「十分満足できる規準に達している生徒の記述や学習成果物はどのようなものか」など、具体的な評価の過程を記載する。また、「『指導と評価の一体化』に係る成果と課題」の部分には、授業者によって次の実践に向けた改善点が示されることになる。したがって、「実践レポート」の２ページ目は、「指導と評価の一体化の充実に向けた具体的な取組の蓄積」ができる構成となっている。

つまり、「実践レポート」の２ページ目については、１ページ目で作成された単元計画に基づいて行われた単位時間の授業の中での学習評価の具体的な実践例と、その実践によって得られた成果と課題が記されることになるため、授業者が自身の授業改善に役立てていくことができるだけでなく、「実践レポート」を見る教員が「学習評価の参考資料」として活用していくこともできるという構成になっている。

「指導と評価の一体化」実践レポート

授業者	
学校名	

1　教科・科目と単元（内容のまとまり）

教科・科目（学年）	
単元	
単元の主な学習目標	

単元を通して身に付けさせたいことや考えさせたいこと、単元の基軸となる学習課題など。

2　単元の評価規準

知識・技能（技術）	
思考・判断・表現	
主体的に学習に取り組む態度	

「単元の主な学習目標」が達成されていると判断できる生徒の状況。

3　単元の指導と評価の計画

※　単一の学習活動について、評定に用いる評価（○）・学習改善に生かす評価（●）が複数ある場合、特に見取りたい観点に「＊」を付し、それに係る評価方法と本時の学習状況を見取るための規準を右に記載する。

本時	時	主な学習活動等	評価の観点			評価方法（＊のみ）	本時の学習状況を見取るための規準（＊のみ）【「おおむね満足できる」状況（B）の規準】
			知	思	態		

次ページで詳しく取り上げる時程に「○」。

授業時間ごとの主な学習活動や核となる学習課題等。

学習活動において見取る観点。

「知」は「知識・技能（技術）」、「思」は「思考・判断・表現」、「態」は「主体的に学習に取り組む態度」。

評定に用いる評価（総括的評価）は「○」、学習改善に生かす評価（形成的評価）は「●」。

ワークシートやノートの記述、ペーパーテスト、行動観察、作品制作、発表活動、ポートフォリオ等、左の観点を見取るための具体的方法。

評価の観点に係る具体的な評価のポイント。（本時の学習状況を見取るための規準）

図４　「実践レポート」１ページ目の構成

4　学習評価の具体

時	本時の学習活動等	本時の学習評価の概要		本時の学習状況を見取るための規準	
				十分満足できる（A）	おおむね満足できる（B）
	「3　単元の指導と評価の計画」と同様。	評価の観点 評価の種類 評価方法	「3　単元の指導と評価の計画」と同様。	(B)規準に加えて、量的・質的な高まりがあるもの。	「3　単元の指導と評価の計画」と同様。
	評価の具体（生徒の学習状況を評価する際のポイント等）				
	評価方法として活用したワークシートにおける生徒の記述や作品等についての具体的な評価の手順やポイント。				
	「指導と評価の一体化」に係る成果と課題（例、△△したことで、□□ができるようになった　等）				
	授業実践を振り返っての手応えや改善点等。				

図５　「実践レポート」２ページ目の構成

(3)　「実践レポート」記載例

以下、「実践レポート」の記載例である（図６、次ページ図７）。なお、「実践レポート」をより効果的に活用するためのガイドラインとして、「実践レポート」の作成を支援する動画も作成している。この動画は、観点別評価や指導と評価の一体化についての理解を深めながら「実践レポート」の作成方法についての理解が進む構成となっている。また、この動画では「実践レポート」を作成する際に重視するべき点や参考となる資料、活用方法等についても紹介しているため、この動画を参考にしながら「実践レポート」を作成していくことで、「実践レポート」の効果的な活用方法を検討することができる。

「指導と評価の一体化」実践レポート

授業者	
学校名	

1　教科・科目と単元（内容のまとまり）

教科・科目（学年）	国語・現代の国語（１学年）
単元	文章の内容や構成、論理の展開などについて的確に捉えて要旨や要点を把握して、論理的な文章における筆者の考えをまとめよう。（田口茂「時を編む人間」　数研出版『現代の国語』）
単元の主な学習目標	言葉には、認識や思考を支える働きがあることを理解できる。〔知識及び技能〕(1)ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握できる。〔思考力，判断力，表現力等〕C(1)ア 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，言葉を通して他者や社会に関わろうとする。〔学びに向かう力，人間性等〕

学習指導要領を参照しながら設定

2　単元の評価規準

知識・技能	言葉には、認識や思考を支える働きがあることを理解している。（(1)ア）
思考・判断・表現	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握している。（C(1)ア）
主体的に学習に取り組む態度	文章で使われている語句や表現を活用しつつ、文章の論理の展開について叙述を基に的確に捉えて記述する活動を通して、自らの学びを調整しながら、要旨や要点を把握することに粘り強く取り組もうとしている。

3　単元の指導と評価の計画

※　単一の学習活動について、評定に用いる評価（○）・学習改善に生かす評価（●）が複数ある場合、特に見取りたい観点に「＊」を付し、それに係る評価方法と本時の学習状況を見取るための規準を右に記載する。

本時	時	主な学習活動等	評価の観点 知	思	態	評価方法（＊のみ）	本時の学習状況を見取るための規準（＊のみ）【「おおむね満足できる」状況（B）の規準】
	1	○単元課題に取り組む。（１回目） ○学習プリントに取り組むことを通して、本文の内容や構成を理解する。 ○振り返りシートへの入力を通して、自らの学びの過程を振り返る。	●		●*	Google フォーム	自分の記述の自己分析を行うとともに、単元課題に生かしたい視点や表現を言語化しようとしている。
	2	○記述課題に取り組むことを通して、本文の内容や構成を理解する。 ○振り返りシートへの入力を通して、自らの学びの過程を振り返る。	●		●*	Google フォーム	本時で学んだことの自己分析を行うとともに、単元課題に生かしたい視点や表現を言語化しようとしている。
○	3	○単元課題に取り組む（２、３回目）ことを通して、本文の要旨や要点を把握する。 ○振り返りシートの入力を通して、自らの学びの過程を振り返る。		●	●*	Google フォーム	本単元で学んだことの自己分析を言語化し、今後の学習活動に生かそうとしている。

担当者間で協働しながら設定

図６　「実践レポート」１ページ目の記載例

4　学習評価の具体

時	本時の学習活動等	本時の学習評価の概要		本時の学習状況を見取るための規準	
				十分満足できる（A）	おおむね満足できる（B）
3	○単元課題に取り組むことを通して要旨や要点を把握する。 ○振り返りシートの入力を通して自らの学びの過程を振り返る。	評価の観点	主体的に学習に取り組む態度	（B）の規準に加え、自身が学んだことをどのような場面で生かしていくか、具体化しようとしている。	本単元で学んだことの自己分析を言語化し、今後の学習活動に生かそうとしている。
		評価の種類	学習改善に生かす評価		
		評価方法	Google フォーム		

評価の具体（生徒の学習状況を評価する際のポイント等）

（A）とした例

「学んだこと」 「できるようになったこと」	「できなかったこと」 「次回見直したいこと」	「これからの学習に生かしたいこと」
「生きている時間」と「空間化された時間」の対比表現の読み取り方。文章の各部分から鍵となるところの文を使って筆者の意見のまとめを作ること。	「生きている時間」と「空間化された時間」に筆者はどのように思っているのかを読み取れなかったこと。筆者の意見のまとめを無駄なく簡潔にまとめること。必要な部分を的確に選ぶこと。	「生きている時間」と「空間化された時間」のような筆者が対比している部分を見て筆者はどのような考えをもっているのかということを推測すること。また、一方、これに対してなどの接続詞に反応すること。

⇒それぞれの質問項目に対して、具体的な言語化ができている。
【（B）規準に加えて】「学んだこと」を「これからの学習」にどう生かすか、具体的に想定できている。

（B）とした例

「学んだこと」 「できるようになったこと」	「できなかったこと」 「次回見直したいこと」	「これからの学習に生かしたいこと」
空間的な時間と生きて動いている時間がどのようにあるのかについてのまとめ方。	空間的な時間と生きて動いている時間の比較があまり詳しくできていなかった。	単元課題のまとめ方やキーワードの探し方を今後の国語の授業で生かしていきたい。

⇒「学んだこと」「できなかったこと」については具体的に分析できているが、「学んだこと」を「これからの学習」にどう生かすか、という想定が具体的にできていない。
【手立て】「学んだこと」をどのような場面に生かせるか。既習の文章で想定してみるよう助言する。

（C）とした例

「学んだこと」 「できるようになったこと」	「できなかったこと」 「次回見直したいこと」	「これからの学習に生かしたいこと」
今まで学んだことを使って単元課題を書けたこと。	最後のまとめ方。	記述で書き出したことを単元課題にまとめること。授業の振り返りをすること。

⇒それぞれの質問項目に対して、具体的な言語化ができていない。
【手立て】具体的な言葉を用いた自己分析の仕方について助言する。（疑問の余地を残さない記述へ）

フィードバックの工夫

振り返りシートの記述の中から、生徒の疑問点や読解不足の部分を抽出し、Q&A形式でフィードバックする。
授業間に示し、生徒はこれを読んでから次の授業に臨む。

Q なぜ「世界」を支配しコントロールするものとして思い描くようになるのか　あまりよく分からなかった

A 「世界」を地球規模のものとして捉えてしまうとよく分からないかもしれません。ここでの「世界」とは、「自分の前に広がる空間」のことです。「空間」は「時間の広がり」や「カレンダー的な時間」のことなので、「世界」＝「自分の前に広がるカレンダー的な時間」と捉えるとよいでしょう。

補足 「カレンダー的な時間」とは、自分が自由にコントロールできる（予定を立てられる）時間のことを指しています。

「指導と評価の一体化」に係る成果と課題（例、△△したことで、□□ができるようになった　等）

【成果】・Q&Aで生徒の疑問に対するフィードバックを行ったことで、「学んだこと」に書かれる記述がより深いものになった。（⇒疑問の解消によって深い学びにつながった）
・自己分析をすることで、次の時間における個人の目標を立てさせることができた。（⇒学びの個別化）
【課題】・振り返りの記述の質を高めるために、自己分析の言語化についての演習を実施したい。

具体的な評価の過程を記載

次の実践に向けた改善点を記載

図７　「実践レポート」２ページ目の記載例

２　「実践レポート」を活用した取組

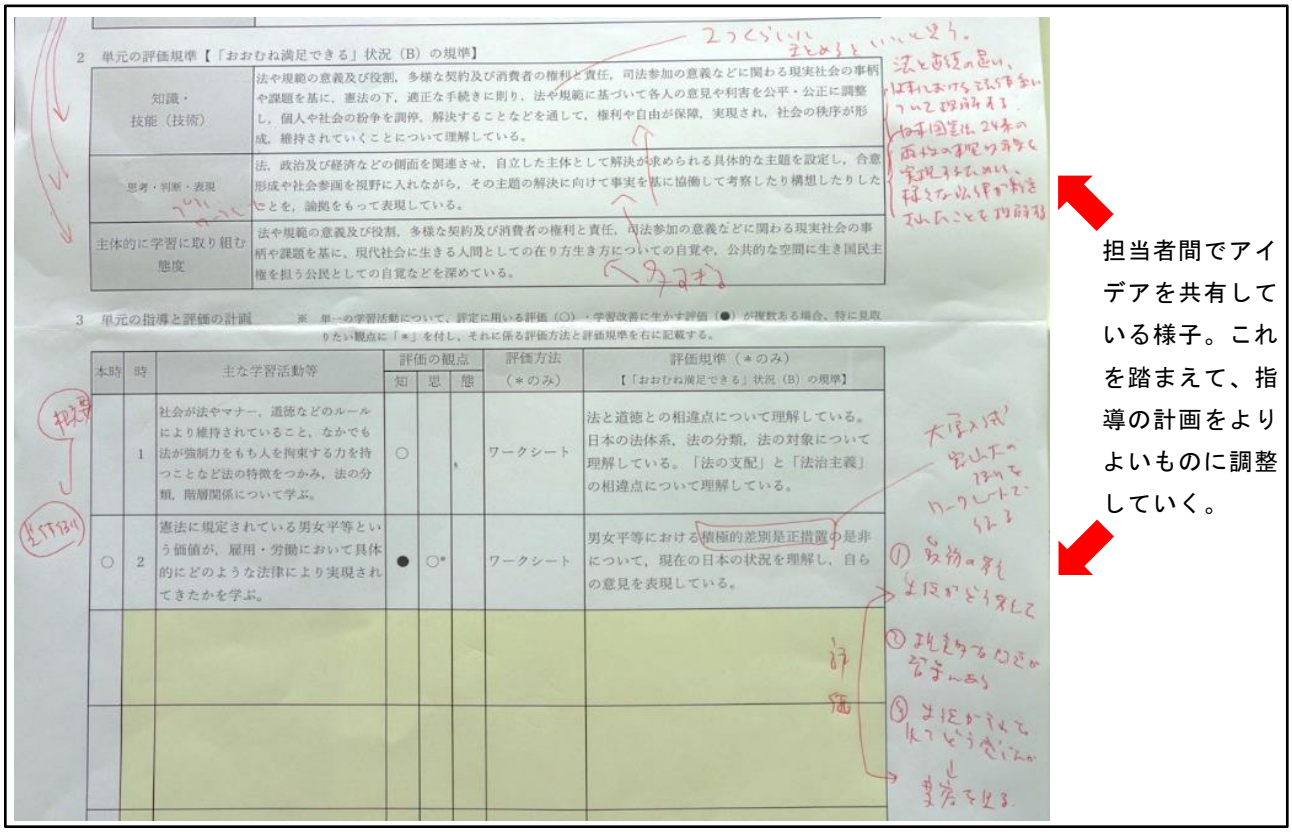
本研究で開発を行った「実践レポート」の効果を検証するために協力校において、１年を通して段階的な取組を行った（表２）。この段階的に行った一連の取組は、「実践レポート」における「指導と評価の一体化の充実に向けた具体的な取組の蓄積」、「評価規準や評価方法の検討と共有」という効果を検証することを目的としている。また同時に、「実践レポート」の作成と活用を行う過程において、協力校の教員の観点別評価についての理解を深めることや、指導と評価の一体化の充実に向けた意識を高めていくというねらいもある。そのため、「実践レポート」を活用した協力校での一連の取組については、「指導計画の作成」、「研究授業及び授業参観の実施」、「授業研究会の実施」、「職員研修会の実施」というＰＤＣＡサイクルを構築し、指導の改善を検討していくということを基本的な流れとした。

表２　協力校における取組

時期	取組	内容
令和４年 ７月下旬 ～９月上旬	「実践レポート」の作成	○単元における目標の設定と、その目標を達成するための指導計画の作成と共有が目標 ○今年度から新しい観点による評価が行われている１学年の授業が対象 ○教科の担当者間において、協議や回覧などの方法を通して、協働しながら「実践レポート」の１ページ目を作成し、単元における指導と評価の計画を共有 ○全学年の同じ教科の担当者が「実践レポート」の作成に参加
令和４年 ９月下旬 ～11 月中旬	研究授業の実施 （授業参観の実施）	○教科内で協働して作成した「実践レポート」における指導計画に基づいて授業を実施 ○１学年の同じ教科の担当者は、同じ「実践レポート」に基づいて授業を実施 ○２・３学年の同じ教科の担当者は研究授業を参観し、単元の目標に対する指導の計画が妥当であるかということを検証 ○授業担当者は、授業後に生徒の学習成果物を踏まえて「実践レポート」２ページ目を作成
	授業研究会の実施	○各教科において、研究授業終了後に適宜機会を設けて実施 ○全学年の同じ教科の担当者が授業研究会に参加し、指導の改善について検討 ○検討の視点 ・単元の目標と評価規準の設定が適切であったか ・各単位時間の評価規準に対して適切な評価方法が設定されていたか ・単元の目標が達成できるような学習活動が設定されていたか
令和４年 12 月	職員研修会の実施	○「実践レポート」に基づいて実施された各教科の実践を全体で共有 ○観点別評価についての理解の深化 ○指導と評価の一体化を充実させるための今後の具体的実践の検討と共有

(1)　「実践レポート」の作成

協力校の教員により、今年度新たな観点による評価が開始された１学年の授業を対象にして「実践レポート」が作成された。なお、「実践レポート」の１ページ目は単元における指導と評価の計画を立てる部分であるため、授業者が個人で作成するのではなく、教科の担当者全員で協議・検討しながら協働的に作成していくことを要点とした。これにより、「単元の学習目標」や「単元の評価規準」に基づいた「単元の指導と評価の計画」が作成された。これが教科内で共有されることを通して、指導と評価についての見通しをもった実践が行われることを目指した（図８）。



2　単元の評価規準【「おおむね満足できる」状況（B）の規準】

知識・技能（技術）	法や規範の意義及び役割，多様な契約及び消費者の権利と責任，司法参加の意義などに関わる現実社会の事柄や課題を基に，憲法の下，適正な手続きに則り，法や規範に基づいて各人の意見や利害を公平・公正に調整し，個人や社会の紛争を調停，解決することなどを通して，権利や自由が保障，実現され，社会の秩序が形成，維持されていくことについて理解している。
思考・判断・表現	法，政治及び経済などの側面を関連させ，自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し，合意形成や社会参画を視野に入れながら，その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したり構想したりしたことを，論拠をもって表現している。
主体的に学習に取り組む態度	法や規範の意義及び役割，多様な契約及び消費者の権利と責任，司法参加の意義などに関わる現実社会の事柄や課題を基に，現代社会に生きる人間としての在り方生き方についての自覚や，公共的な空間に生き国民主権を担う公民としての自覚などを深めている。

3　単元の指導と評価の計画　※　単一の学習活動について，評定に用いる評価（○）・学習改善に生かす評価（●）が複数ある場合，特に見取りたい観点に「＊」を付し，それに係る評価方法と評価規準を右に記載する。

本時	時	主な学習活動等	評価の観点 知	思	態	評価方法（＊のみ）	評価規準（＊のみ）【「おおむね満足できる」状況（B）の規準】
	1	社会が法やマナー，道徳などのルールにより維持されていること，なかでも法が強制力をもち人を拘束する力を持つことなど法の特徴をつかみ，法の分類，階層関係について学ぶ。	○			ワークシート	法と道徳との相違点について理解している。日本の法体系，法の分類，法の対象について理解している。「法の支配」と「法治主義」の相違点について理解している。
○	2	憲法に規定されている男女平等という価値が，雇用・労働において具体的にどのような法律により実現されてきたかを学ぶ。	●	○＊		ワークシート	男女平等における積極的差別是正措置の是非について，現在の日本の状況を理解し，自らの意見を表現している。

担当者間でアイデアを共有している様子。これを踏まえて、指導の計画をよりよいものに調整していく。

図８　「実践レポート」作成の過程

(2)　研究授業の実施

協力校の１学年の授業において、教科の担当者が協働して作成した「実践レポート」に沿った実践が行われた。なお、１学年の授業において複数人で同一の教科を担当している場合には、同じ「実践レポート」に沿った授業が行われた。また、１学年以外の同じ教科の担当者によって、授業の中で指導と評価の一体化が実践できているかという視点で授業参観が行われた。これらは、「実践レポート」の作成によって設定された指導の計画についての改善に向けた検討を行うためである。

研究授業においては、参観者が生徒の学習の様子を観察するだけでなく、設定した評価規準や学習活動が生徒の実態に即して適切であったかということを参観者同士で検証したり、より効果的な評価方法について検討したりする様子が見られた。

(3)　授業研究会の実施

各教科での研究授業終了後に順次授業研究会が行われた。この授業研究会は、単位時間の指導上の手立てや工夫等の検討を重視して行うのではなく、「単元の目標と評価規準の設定が適切であったか」、「各単位時間の評価規準に対して適切な評価方法が設定されていたか」、「単元の目標が達成できるような学習活動が設定されていたか」という、単元の指導と評価の計画についての検証を重視して行われた。

授業研究会では、研究授業の実施や参観によって得られた成果や課題についての検討が行われ、次の単元の指導や評価に向けて改善できる部分についての意見が挙げられていた。

(4)　職員研修会の実施

「実践レポート」を活用した取組のまとめとして、全体での職員研修会を実施した。なお、この職員研修会は、主に三つの目的をもって行った。一つ目はこれまで取り組んできた「実践レポート」を活用した各教科の実践を全体で共有すること、二つ目は観点別評価の目的や方法について再確認し、観点別評価についての理解をより深めること、三つ目は指導と評価の一体化を更に充実させていくための工夫やアイデアについて検討し、全体で共有することである。これにより、今後の授業や教科の取組について、改善に向けた検討が行われることを目指した。

職員研修会では、同じ教科だけでなく他教科と意見交換をしながら、お互いの実践を参考にしている参加者の様子が見られた。また、教科内で共有された評価規準や評価方法を、シラバス等を通して生徒に事前に提示することを検討している様子も見られた。

Ⅲ　結果と考察

「観点別評価の理解をより深めること」や「指導と評価の一体化の充実に向けた意識を更に高めること」を実現できたか、「アンケート調査の結果」及び「職員研修会での記述の様子」から検証する。

1　アンケート調査の結果

「実践レポート」を活用した協力校での取組の最後に、年度初めと同じ質問内容のアンケート調査を行った（回答数 36）。このアンケート調査を通して、協力校の教員の観点別評価についての理解や指導と評価の一体化についての意識の変容を分析し、「実践レポート」の効果について検証した。

(1)　観点別評価についての理解

「『観点別学習状況の評価』について、どの程度理解しているか」という質問に対する回答は、年度初めのアンケート調査では「しっかり理解している」、「ある程度理解している」を合わせて 36.4%であったのに対して、職員研修後のアンケート調査では「しっかり理解している」、「ある程度理解している」を合わせて 94.4%となり、58.0 ポイントの数値の向上が見られた（図９）。したがって、アンケート調査の結果から協力校の教員の観点別評価についての理解が深まったと言える。これは、協力校の教員の今年度の実践や経験を踏まえて「実践レポート」を効果的に活用した結果であると考えられる。

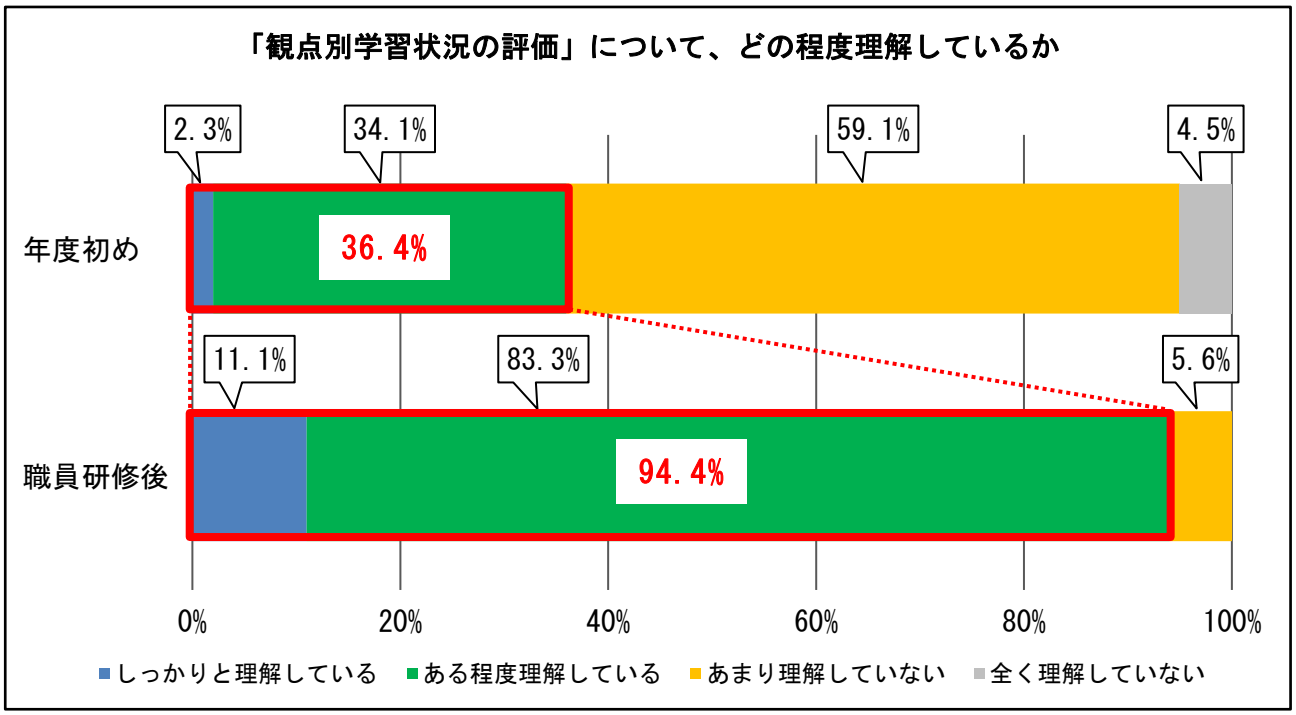


図９　年度初めと職員研修後の、協力校の教員に向けてのアンケート調査の結果の比較①

(2)　指導と評価の一体化の充実に向けての意識

「『指導と評価の一体化』について、どの程度意識して授業をしているか」という質問に対する回答は、年度初めのアンケート調査では「しっかり意識している」、「ある程度意識している」を合わせて 31.8％であったのに対して、職員研修後のアンケート調査では「しっかり意識している」、「ある程度意識している」を合わせて 61.1％となり、29.3 ポイントの数値の向上が見られた（図 10）。したがって、アンケート調査の結果から協力校の教員の指導と評価の一体化の充実に向けた意識が高まっていると言える。

なお、前ページ図９の結果と比較して、変化が小さい理由としては、新たな観点による評価が実施されている対象が１学年のみであり、２・３学年では実施されていないということが影響していると考えられる。

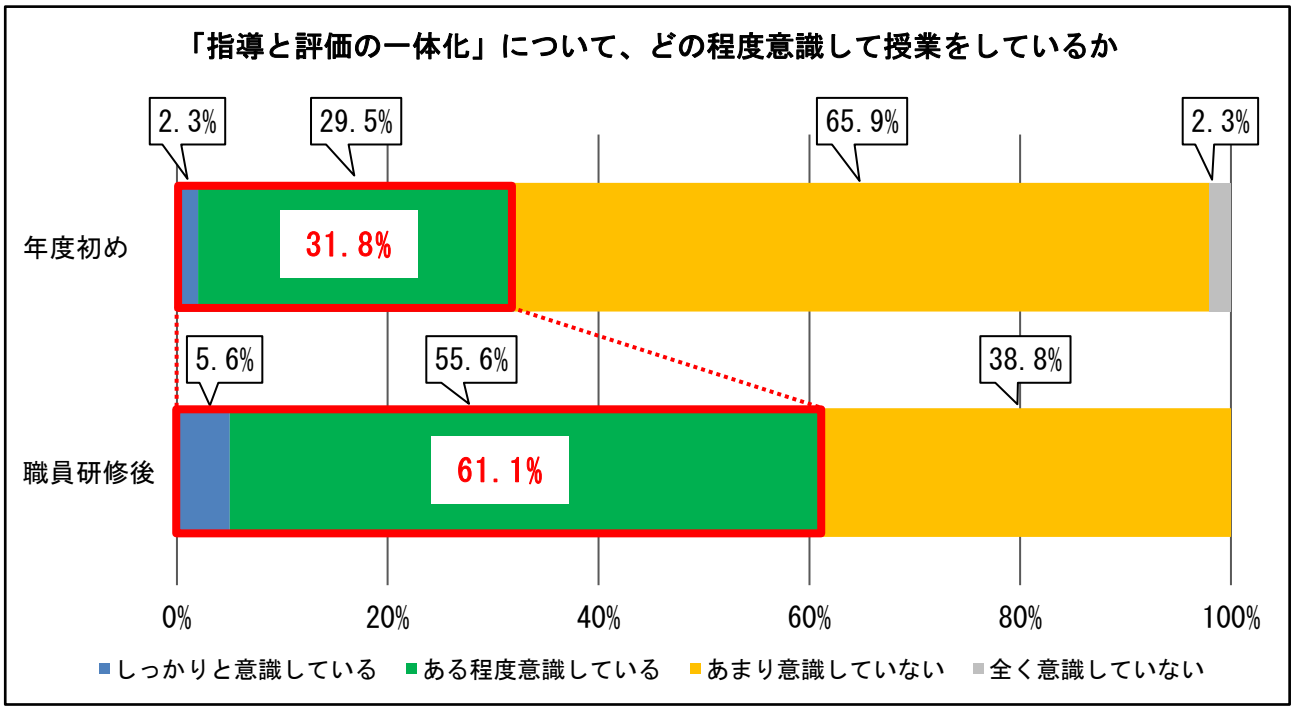


図 10　年度初めと職員研修後の、協力校の教員に向けてのアンケート調査の結果の比較②

２　職員研修会での記述の様子

「実践レポート」を活用した協力校での取組のまとめとして実施した職員研修会では、「指導と評価の一体化を充実させていくために、今後の授業づくりに向けて実践していきたいこと」として、指導と評価の一体化を更に充実させていくための工夫やアイデアについて検討し、全体で共有するという活動を行った（次ページ表３）。その結果、「単元を貫く問いを初めと学習後に表現させる」、「アンケートフォームを利用して、生徒へのプリントの配信と状況把握を行う」、「学習カードを活用して評価に生かす」など、具体的な取組の工夫やアイデアが挙げられた。また、「教科、学年の先生方と評価規準や教材など、授業に関しての情報共有をする」、「クラス、学年の垣根を越えて、先生方と授業の情報共有をし、授業改善を図る」、「レポートフォルダや教材フォルダの作成を通して、他教科の実践を共有する」など、評価規準や評価方法、指導方法などの共有化に関する工夫やアイデアも挙げられた。

以上のことから、協力校において指導と評価の一体化を充実させていくための具体的な取組のイメージや、評価規準や評価方法の共有化についての意識が形成されていることが分かる。これは、本研究における「実践レポート」を活用した取組をきっかけとして、教科内で様々な意見交換がなされた結果であると考えられる。

表３　指導と評価の一体化を更に充実させていくための工夫やアイデア（一部抜粋）

教科	記述内容
国語	・生徒自身が到達度を実感でき、自己の課題を把握できるような振り返りを行う ・教科、学年の先生方と評価規準や教材など、授業に関しての情報共有をする ・単元や本時のめあてを提示し、生徒に学習の見通しを持たせる
地歴・公民	・単元を貫く問いを学習前と学習後に表現させる ・学んだことやこれからの学習に生かしたいことを振り返りシートに記入させる ・作成したレポートを使ったプレゼンテーションを行い、相互評価させる
数学	・クラス、学年の垣根を越えて先生方と授業の情報共有をし、授業改善を図る ・生徒に疑問をもたせるような本質的な問い方を検討する ・生徒が協議しながら問題を解いていく活動を取り入れる
理科	・単元を貫く問いを軸に、単元全体の指導を計画していく ・アンケートフォームを利用して、生徒へのプリントの配信と状況把握を行う ・質問項目を検討し、振り返り活動を充実させていく
保健体育	・学習カードを活用して評価に生かす ・グループでの発表等、アウトプットの機会を設ける
外国語	・自分の声が周りにどう聞こえるか録音して聞かせ、客観視させる ・単元末に探究的な課題を設定し、生徒に主体的に取り組ませる ・学習プリントやその他の教材を教科内で共有して活用する
芸術・家庭・情報	・各教科の実践レポートを共有し、指導の参考にする ・レポートフォルダや教材フォルダの作成を通して、他教科の実践を共有する

Ⅳ　まとめ

１　研究成果

(1)　観点別評価についての理解の深化と指導と評価の一体化の充実に向けての意識の向上について

職員研修後のアンケート調査の結果から、協力校の教員の観点別評価についての理解の深化や、指導と評価の一体化の充実に向けての意識の向上を見取ることができた。これは、本研究における「実践レポート」を活用した取組が、協力校の教員に主体的な参画を促すきっかけとなった結果であると考えられる。したがって、「実践レポート」のように、教科の担当者間で指導の計画を協働して検討し共有できるような仕掛けを作ることで、当事者の観点別評価についての理解の深化や、指導と評価の一体化の充実に向けての意識の向上を促すことができると考えられる。

(2)　指導と評価の一体化を充実させるための具体的な取組のイメージの構築について

「実践レポート」を活用した協力校での取組によって、教科の担当者間で指導と評価の一体化を意識した指導の計画を協働して作成する機会を生み出すことができた。その結果、協力校での研究授業においては、指導と評価の一体化を意識した授業が各教科で実践されることとなった。また、職員研修会では指導と評価の一体化を充実させるための具体的な工夫やアイデアが各教科から挙げられた（表３）。

以上のことから、本研究における「実践レポート」を活用した取組は、指導と評価の一体化を充実させるための具体的な取組のイメージを構築することに寄与できるものと考えられる。

(3)　評価規準や評価方法を検討し共有する意識の向上について

協力校での職員研修会で行った活動においては、教員の記述内容から、評価規準や評価方法を検討し共有する意識が向上している様子が見られた（表３）。これは、「実践レポート」の作成を通して、教科の担当者間で「単元の指導と評価の計画」をあらかじめ共有しておくことの重要性を再確認したためであると考えられる。また、職員研修会での意見交換では「シラバスの作成の際にも活用してみたい」という意見も挙げられていた。したがって、「実践レポート」を教科の担当者間で協働して作成することによって、評価規準や評価方法を検討し共有する意識を向上させる効果が

生み出せるだけでなく、生徒との共有にもつなげていくことができると考えられる。

(4)　「実践レポート」の集積による「事例集」の作成について

本研究では、「実践レポート」を協力校での取組に活用しただけでなく、令和４年度の経験者研修における示範授業や代表者授業、特別研修員等による研究授業での実践事例についての集積も行った。これについては、県内の教員が活用できるように、「事例集」という形で整理した。この「事例集」は、学習評価についての効果的な実践を授業に取り入れていくための参考資料として活用することができるため、閲覧する教員が自身の授業を改善していくきっかけとなり、指導と評価の一体化を更に充実させていく上で有効である。また、「事例集」を活用して他者の実践を参考に授業づくりをしていくことは、業務負担の軽減の観点からも有益である。

２　課題と提言（指導と評価の一体化の更なる充実に向けて）

本研究における「実践レポート」を活用した協力校での取組では、指導計画の改善まで十分に扱うことができず、評価を次につないでいくという意識の向上が不十分であった。そのため、指導の記録を蓄積するための様式を活用しながら、次の実践に向けての授業改善を検討していくことが必要である。なお、指導の記録を蓄積するための様式は、学校の状況によって様々な形式が想定できるが、本研究で開発した「実践レポート」を活用していくこともできる。

具体的には、「実践レポート」の「学習評価の具体」にある「評価の具体」及び「『指導と評価の一体化』に係る成果と課題」の部分を活用し、次の単元の評価規準や評価方法を検討する際の参考にしていくことが有効である。また、「実践レポート」の「単元の指導と評価の計画」の部分を活用し、次年度の指導計画を検討する際の参考にしていくことも有効である。このような、「実践レポート」等を指導の記録の蓄積のために活用し、次の指導に生かしていく取組は、協力校だけでなく、群馬県全体で共有できる取組であると考えられる。

以上のことから、「評価」を「次」の学習や指導につなげるサイクルを構築して改善を重ねていくことで、学校全体で指導と評価の一体化を更に充実させ、生徒の資質・能力の向上を目指していくことが重要である。

＜参考文献＞

・文部科学省編（2018）　『高等学校学習指導要領（平成 30 年３月告示）』　東山書房
・文部科学省編（2018）　『高等学校学習指導要領解説総則編（平成 30 年７月）』　東洋館出版社
・文部科学省　国立教育政策研究所　教育課程研究センター編（2021）　『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　高等学校』　東洋館出版社
・中島実奈・石井千裕（2021）　『「指導と評価の一体化」の促進に向けて―動画とワークショップによる研修コンテンツの提案―』　群馬県総合教育センター
・倉林正・伏島悠平・寺内圭（2022）　『学習評価について理解を深めるための研修コンテンツの開発と端末を活用した研修実践―「自走」する教員の構築に向けて―』　群馬県総合教育センター
・大阪府教育委員会編（2021）　『新学習指導要領の趣旨を踏まえた「観点別学習状況の評価」実施の手引き～育成すべき 資質・能力をバランスよく確実に 育むために』
・大阪府教育委員会編（2021）　『新学習指導要領の趣旨を踏まえた「観点別学習状況の評価」実施の手引き～育成すべき 資質・能力をバランスよく確実に 育むために　各教科事例集』
・大阪府教育センター編（2022）　『高等学校における校内授業実践研究進め方ガイドブック』
・宮城県教育委員会編（2022）　『学習指導資料「学習評価の事例集」（宮城県版）』

＜担当指導主事＞

坂本　直之　　阿左見　充良